九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会的情報処理モデルからみた自閉スペクトラム症児の対人関係様式の変容とその要因

五位塚，和也

https://hdl.handle.net/2324/2556278

出版情報：九州大学，2019，博士（心理学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（様式３）

氏　　名　：五位塚　和也

論 文 名　：社会的情報処理モデルからみた自閉スペクトラム症児の対人関係様式の変容とその要因

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，対人関係における適応上の問題と関連して心理的混乱を示しやすい学齢期の自閉スペクトラム症児（以下，ASD 児）を対象として，対人行動とその背景に生じている心的過程を含んだ対人関係様式について検討した。

第 1 章では，ASD 概念および原因論をめぐる研究の歴史的変遷について概観し，ASD 児の心の理解の発達と心理社会的適応について検討したところ, ASD 児における他者の心や対人的出来事に対する主観的な捉え方を検討する必要があることが指摘された。そこで，本論文では，発達心理学の領域において他者の心的状態の解釈から対人行動に至る一連のプロセスを詳細に検討するアプローチとして「社会的情報処理 Social Information Processing（以下 SIP）モデル」による研究アプローチを応用し，①ASD 児の対人関係様式の特徴について検討を行うこと，②ASD 児の対人関係様式に影響を与える要因について検討すること, ③ASD 児の対人関係様式の変容を促進する臨床心理学的支援について検討することを目的とした。

第 2 章では，ASD 児を対象とした SIP に関する文献研究を行ったところ，定型発達児との比較検討から，ASD 児は不正確な符号化や非社会的な目標設定，攻撃的な反応や回避的な反応の想起，受身的反応を肯定的に評価し，主張的行動を否定的に評価することなど，ASD 児が否定的な SIP 様式をもつことが指摘されているものの，情動的側面との関連性や否定的な SIP 様式の変容の可能性について検討した研究は少なく，その点が課題であると考えられた。

第 3 章では，SIP モデルからみた ASD 児の対人関係様式の変容とその変容に関連する要因について仮説を生成することを目的として，事例検討を行った。第 3 章の事例 A は，対人関係のなかで他者が自分に対して否定的な意図を向けていると捉え，他者への非難や拒絶を示す ASD 児であったが，事例の経過のなかで他者の意図を否定的に解釈する傾向は少なくなり，他者との親密な関係性を求めて，他者への配慮行動や承認がみられるようになった。そのような経過から，ASD 児の対人関係様式の変容に関して，他者との親密な関係性と他者の好意に対する気づきの経験が重要な要因となっていることが考えられた。

そこで, 第 4 章では, 第 3 章において見出された他者との親密な関係性の要因について検討した。事例 A の経過と，ASD 児の仲間関係についての先行研究から，ASD 児が社会的な場面を認知し他者に応じる際に，他者との関係性を重要な社会的手がかりとして優先的に注意を向けるという仮説を立てた。その仮説を検証するため，仮想的対人場面を用いて，ASD 児の社会的手がかりの符号化の特徴について調査した。その結果，ASD 児は他者の発話を解釈するときや他者への応答を決定する際に人物間の関係性に注意を向けること少なく，教示に含まれない主観的な情報を追加する反応が多いことが示された。

第 5 章では，第 3 章において見出された，他者から向けられる好意に対する気づきの経験が SIP 様式に及ぼす影響について，第 5 章第 1 節では定型発達児を対象として調査し，第 5 章第 2 節で ASD 児を対象として調査した。まず第 5 章第 1 節では，調査の結果，敵意帰属傾向が強いほど，友好的目標設定を行う傾向が弱くなり，攻撃行動を選択する傾向が強くなり，抑制的な主張行動や無罰的行動を選択する傾向が強くなるプロセスが示された。さらに，他者からの好意が明示的である条件では，非明示的である条件よりも，敵意帰属を行う傾向が弱く，友好的な目標設定を行う傾向が強く，言語的攻撃を選択する傾向が弱いことが示された。第 5 章第 2 節では，ASD 児においても他者からの好意が明示的である条件の方が，非明示的である条件よりも，敵意帰属を行う傾向が弱く，友好的目標設定を行う傾向が強いこと，攻撃行動を選択する傾向は弱いことが示された。また，ASD 児の SIP 様式と心理社会的適応との関連性を検討した結果，社会性や抑うつや不安などの情動的な問題が関連することが示された。

第 6 章では，第 5 章の結果をもとに，ASD 児の対人関係様式の変容を促す臨床心理学的支援として，他からの好意への気づきや肯定的な情動体験の活性化に焦点化する支援が ASD 児の対人関係様式と日常生活の心理社会的適応状況に及ぼす影響について，事例の経過と継続的に実施された SIP 様式の測定データを用いて検討を行った。第 6 章の事例 H は，経過のなかで自発的に日常生活での肯定的な体験をセッション内で表現するようになった。事例の経過に伴って SIP に関する調査結果についても，人物間の関係性の符号化が増加し，不正確な符号化の減少がみられるようになり，H の対人的出来事に対する注意の向け方が変化していることが推察された。

以上の研究から，第 7 章では各研究の知見の概要をまとめ，第 4 章および第 5 章の横断的実証研究の結果を総合し，ASD 児の SIP 様式の特徴について考察した。さらに，第 4 章および第 5 章の横断的実証研究と第 3 章および第 6 章の事例研究から得られた知見を総合し，SIP モデルからみた ASD 児の対人関係様式の変容とその変容のプロセスを促進する臨床心理学的支援について検討し，本論文の実践的意義について考察した。